

苏州大学

2010 年攻读硕士学位研究生入学考试试题

专业名称: 日语语言文学

考试科目: 综合日语 (A 卷)

- 一、次の () に適当な仮名を入れなさい。(10 点 各 1 点)
- 夜船で寝ることは、罪人にも許されている () ()、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。
 - 喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽し () () に、口笛を吹き始めるとかしそうに思われた。
 - 遠慮の意味は「気兼ね」や「こだわり」とほとんど同義であるといつてよい。() () ()、相手の好意に甘え過ぎてはいけないというので遠慮するのである。
 - 私のような経験の浅いものを採用 () () いただき、光栄の至りで () () () () ()。
 - 今日では海外旅行も国内旅行も時間ではあまり変わらなくなった。それ () () に地球上の時間の距離は短縮されたわけである。
 - 卒業するまでは国には帰らない () () () だ。もし帰るとしても、それは卒業してからになるだろう。
 - アパートに帰ってドアを開けようとして、鍵がないのに気がついた。どこで落としたのか覚えていないので、さがそう () () さがしようがない。
 - 最近女性の社会進出は目覚ましいとはいえ、女は家庭を守る () () だという考えも根強く残っている。
 - 天気のかんに () () () () () 予定通り、運動会を実施します。
 - この間、絶望のため高層ビルから飛び降りる若者が増えたと新聞には書いてあったが、それは () () () () () () 誤報だ。

- 二、次の①、②、③、④の中から、() に最も適当なものを一つ選びなさい。(10 点 各 1 点)
- 昭和十九年秋までイモ畑や飛行場への転用をのがれたゴルフ場に、ゴルファーたちは「非国民」と ()、唐草模様のフロシキに道具を包んで通ったという。
①言わせるほど ②言われるほど ③言われながら ④言うほど
 - 私が知っている姨捨山の棄老伝説は全くこの絵本に依ったもので、それを () 修正することなしに今日まで持ち続けている。
①なんらか ②なにか ③なんぞ ④なんら
 - 「……こうこういうわけの娘ですから、お嫁というよりも、楽しい娘時代を取り戻させて () と先方の母親によく話してある。」と縁談を持ってきた父に言われる
注意: 答案请不要做在试题纸上。

- と娘の芳子が泣いた。
①もらってください ②もらいなさい
③やってください ④やってあげなさい
- 後年大学時代、私は夏の休暇に郷里に帰省し、偶然土蔵の戸棚の中からこの絵本「おばすて山」を発見し、() これに眼を通したことがある。
①あらかじめ ②あらたまつて ③あらためて ④あらたに
 - 生来老人嫌いの母であったが、今や彼女自身年齢から言えば () とした老人であった。
①れっき ②くつきり ③きっちり ④きっぱり
 - しかしじつと () と寒いので私たちはまた静かな渚づたいに歩き出した。
①動かなくなった ②動かせる ③動かずにいる ④動かずにいた
 - 信濃の清澄した空気を透して、千曲川、犀川を包含した、萬景一碧の広野に照り渡る月の眺めは () 壮観ではあると思ったが、……
①なんとか ②なるほど ③なんらか ④なにやら
 - その近くにある K 村が無医村だというので、某は頼まれてそこで開業し、() 居ついてしまった形のものであった。
①それだけ ②それきり ③それなのに ④そればかり
 - 技術の巧拙は問う処ではない、掲げて以て衆人の展覧に供すべき製作としては、() 我慢強い自分も自分の方が佳いとは言えなかった。
①こんな ②こんなに ③いかなる ④いかに
 - いつか其処に一臥してしまい、自分は蒼蒼 () 大空を見上げていると、川瀬の音がそうそうとして聞える。
①なり ②なる ③たり ④たる

三、次の言葉の解釈にふさわしいものを ABCD の中から一つ選べ。(10 点 各 1 点)

- あごを出す
A. 大笑いすること。
B. とても疲れ、「もうだめだ」という様子を見せること。
C. 得意な様子を言うこと。
D. 驚いてあきれること。
- 足下にもよりつけない
A. 物事が進展しないこと。
B. 相手の弱点につけ入ること。
C. 相手が格段に優れていてとても及ばないこと。
D. 相手の弱点を見抜くこと。

注意: 答案请不要做在试题纸上。

3. 息が合う
A.一緒に何かするとき、お互いの気持ちや調子がぴったり合うこと。
B.息ができなくなること。
C.賛成の意を示すこと。
D.呼吸をすること。
4. 肩を張る
A.肩をそびやかして得意げに歩くこと。
B.重い責任などを引き受けること。
C.威勢のある態度を示すこと。
D.責任を果たして安心すること。
5. 嘴をはさむ
A.白状すること。
B.お互いの話が違わないようにすること。
C.申し入れること。
D.人の話に割って入ること。
6. 心にもない
A.本気でそう思っているわけではないこと。
B.夢中にさせること。
C.遠慮すること。
D.いろいろと配慮すること。
7. 手が込む
A.方法や手段があること。
B.とても忙しいこと。
C.精巧で、手間がかかっている、複雑だということ。
D.働く人の数が足ること。
8. 腹に落ちる
A.根性が悪いこと。
B.落ち着くこと。
C.心配しなくなること。
D.納得がいく、なるほどと思うこと。
9. 懐を痛める
A.分の金を出すこと。

- B.お金が十分あること。
C.けちな人を指すこと。
D.おかねがあまりないこと。
10. 耳を洗う
A.俗世間の榮達にとらわれない高潔な心でいること。
B.聞くのが辛いこと
C.聞いて不愉快になること。
D.注意して聞くこと。

四、下記 a、b、c の俳句の作者を右のア、イ、ウから選び、名前の読み方を書いて、
各々の季語、切れ字を書き抜け。(9点 各1点)

- | | |
|-----------------|--------|
| a 古池や蛙飛び込む水の音 | ア 井原西鶴 |
| b 長持ちに春ぞ暮れゆく更衣 | イ 小林一茶 |
| c われと来て遊べや親のない雀 | ウ 松尾芭蕉 |

五、次の文をよく読んで後の問に答えよ。(計 32 点)

ゆく河の流れは⑦絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、
かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と、栖とまたかく
のごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、薨を④争へる、高き、いやしき、人の住ひは、世々
を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或は
去年焼けて、今年作れり。或は大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変ら
ず、人も⑨多かれど、いにしへ⑤見し人は、二三十人が中に、わづかにひとりふたりな
り。朝に死に、夕に④生るるならひ、ただ水の泡にぞ⑩似たりける。

知らず、生れ⑥死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り、
誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を⑧喜ばしむる。その主と栖と、無常を争ふ
さま、いはばあさがほの露に異ならず。或は露落ちて花残れり。残るといへども朝日
に枯れぬ。或は花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つ事なし。

問一、例に倣って、下線 ⑦ー⑩ の各語群にそれぞれ文法説明をしろ：(14 点)

- 例： 雇はるる 雇は 四段活用動詞「雇ふ」の未然形
るる 受身、可能助動詞「る」の連体形
- ⑦ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑧

問二、問題文の作者名と作品名をそれぞれ書け：(2 点)

- | | |
|-----|-----|
| 作者名 | 作品名 |
|-----|-----|

問三、問題文中「かくのごとし」とあるが、「かく」は具体的にはどういうことを言っているか、簡潔に説明しろ： (3点)

問四、問題文中「棟を並べ、薨を争へる」とあるが、何を修飾しているか、説明しろ： (2点)

問五、問題文中「尽きせぬ」とあるが、その意味を説明しろ： (2点)

問六、「たましきの……」以下の文は、前の段落の文とどんな関係にあるか、簡潔に説明しろ： (4点)

問七、「待つ事なし」の主語を指摘しろ： (1点)

問八、文中から対句をなしている表現を指摘しろ： (4点)

六、日本近代文学の流れに基づき、下記の文の各空欄にそれぞれ最も適当だと思うものを埋めよ： (17点 各1点)

- 近代文学の出発点となったのは坪内逍遙の_____に始まると言える。この中で、戯作やを_____排除し、人情・世相をありのままに描く_____主義を唱えた。ついで、二葉亭四迷は_____体で書いた『浮雲』を著わした。
- 近代啓蒙期の文学は、戯作文学、_____、_____の3つに分類される。
- 日清戦争の前後には、北村透谷の雑誌_____を中心として、個性を尊重し、自我の解放を唱える_____主義が文壇の主流となった。_____が『にぎりえ』・『たけくらべ』などの優れた作品を発表した。
- 日露戦争後、社会矛盾が深刻化するにつれて、人間生活の暗黒面をありのままに観察し写し出そうとする_____主義が文学の主流となっていった。
- 『鼻』は1916年、_____の創刊号に発表された。
- 私小説は明治末期の_____主義作家によって始められ、大正期に_____によって受け継がれた。
- _____は島崎藤村の最初の長編で、明治39年3月に出版された。
- 『舞姫』の文体は_____である。

七、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 (計35点)

法隆寺の五重塔の修復を手がけた宮大工のNさんの話です。五重の塔工事で、(ア) _____解体を終え、再建も初層二層三層と進んで、四層目も組みあがったとき、
どういふものかこの底の真ん中がたるんで、下がってきた。綿密な点検を繰り返した。が、手落ちが見い出せない。屋根はちょうど無気力にぼかんとした人の、下唇の形に似てだれている。原因が① _____ないのだから、② _____ても③ _____てもいられない焦燥だが、といて工事は進行させねばならず、手下を休めておくこともできない。進退④ _____
_____ そうな苦悩だった。

その時屋根屋が来た。この人は古くからの仕事仲間で、互いに深い信頼を⑤ 合い、現に塔の仕事もここまで一緒にしてきている。その彼が来て言った。そのなあ、この屋根、これでいいんやろか、と。

Nさんはこれ以上なく辛かったそうです。それで、そう思うやろなあ、とだけしか答えられなかったそうです。すると屋根屋さんは、そうかあ、とこれもひと言だけうなずいて、しずかに戻っていったんだそうです。

そうこうするうちに日はたって、五層の仕事は順々に進み、(イ) _____屋根を葺くばかり、(ウ) _____四層の屋根は後回しにして、五層へ先に瓦を置き始めてみると、(エ) _____四層の軒のだれがころもち上がってきたように見え、(オ) 五層を葺き終えるころには、軒はだれの後も見せず(カ) _____と締まって、下から見上げれば層々の五重に重なる軒の端は、あるべきようにきっちんと、端正にそろっていたといいます。Nさんは“自分は何もできなかった、したのは(キ) _____苦しい思いだけだった。そんなものは実際の仕事には何の役にも立たない——だがなあ、あの軒はなあ、軒自身の力だけで、一人で上がってくれたんや。”と話すのです。

いい話でした。事がらに迫力があり、結末に救いがあり、すがすがしい話でした。でもこのすがすがしい話の中で、私が(ク) _____強く打たれたのは、棟梁と屋根屋さんの会話です。

そのなあ、この屋根、これでいいんやろか。——そう思うやろなあ、——そうかあ。ぎりぎりの短い言葉、切り詰めきった会話です。

こんなみごとな会話があるのでしょうか。西のほうの言葉は総じて、角が取れて、滑らかに耳に流れいります。それにしても、この最短の言葉にあふれる情感の濃さは、どうでしょう。屋根屋にしてみれば、一番言いたくない相手に、一番言いたくないことを、あえて言いに来ているのです。⑥ (_____)、という少しためらいのある、そして少し間延びのしている前置きよりほか言い出しようがなく、Nさんの心中を押し量ればはらはらとして、⑦ (_____)、とそっと聞くしかなかったでしょう。

だがNさんは答えられない。返事ができるくらいなら苦悩はない。だから直接の返事はできないまま素通りして、相手の立場の困却を思いやり、自分のどうしてみようもなさを嘆き、それがゆえにそちらへも迷惑をかけてとわびる気持ちもなじんで、⑧ (_____)、と自然に一歩ずれた返事になる。屋根屋は(ケ) とがめがましい気など

毛ほどもないし、Nさんの一つずれた返事を聞けば、この長年信頼しあってきた仕事仲間に、この上もう何を言うことがあろう。㊤ (), という言葉は表向きの意味は納得、ということだろうが、この場合は多分、ともに愁える気持ち、いたわりの気持ち、で言われているのではないだろうか。語調にそんな響きを聞いたのですが、これは私の感じすぎでしょうか。

そしてもう一つ、話のしまいのほうのNさんの述懐です。屋根は自分ひとりの力で上がってくれた、というその、㊦ (), です。上がったのではなくて、上がってくれたのです。(コ) 、屋根に恩恵を㊧ れたみたいな言い方です。それだけにNさんの助かったという思いもよくわかるし、軒がたれていた期間中の、Nさんの方策㊨ た苦悩の重さもよくわかります。仮名で(サ) 三字ですが、みごとな言葉です。

(幸田 文『ことばの情感』<一部改変・省略>)

問一 空欄㊠～㊦に、次の動詞群の中から最も適当なものを選び、正しく活用させて、入れよ。(7点)

施す きわる 居る 尽きる 立つ 置く つかめる

問二 空欄の㊢～㊥に、文中の語句を使って、最も短い形で入れよ。(5点)

問三 空欄(ア)～(サ)に、次の語句のうちから最も適当と思うものを選んで符号で答えよ。(11点)

(A) やむなく (B) すでに (C) たった (D) ただ
(E) もともと (F) まるで (G) はっと (H) もう
(I) いつとなく (J) きりっと (K) ついに

問四 文中から対句的表現を二箇所抜き出せ。(2点)

問五 この文章の特色として、次のどれが当てはまるか、最も適当だと思うものを二つを符号で答えよ。(4点)

(A) 息の長い文でゆったりとうねるように書かれている。
(B) ところどころに置かれた短い文が全体にリズム感を与えている。
(C) 漢語が多く重々しい調子を出している。
(D) 問いかけや反語などを使い、語りかけるような感じを出している。
(E) ローマ字などを使い、ハイカラな感じをないように与えている。

問六 本文を内容上大きく前後二つに分けるとすれば、どこで分ければよいか。後段のはじめの五字を答えよ。(2点) また、その理由を簡単に説明せよ。(4点)

八、次の文章は志賀直哉の『暗夜行路』の一節である。これを読んで後の問いに答えよ。(計27点)

私が自分に祖父があったことを知ったのは、私の母が産後の病気で死に、その後二月ほど経って、㊠不意に祖父が私の前に現れてきた、そのときであった。

私の六歳の時であった。

ある夕方、私は、一人で、門の前に遊んでいると、見知らぬ老人がここへ来て立った。眼の落ち窪んだ、猫背のなんとなくみすぼらしい老人だった。わたしはなんということなくそれに反感を持った。

老人は笑顔を作ってなにか私に話しかけようとした。しかし私は一種の悪意から、それをはぐらかして下を向いてしまった。釣りあがった口元、それを囲んだ深い皺、変に下品な印象を受けた。「早く行け。」私は腹でそう思いながら、なお意固地に下を向いていた。

しかし老人はなかなかその場を立ち去ろうとはしなかった。私は妙にいたたまらない気持ちになってきた。私は不意に立ちあがって門内へ駆け込んだ。その時、

「オイオイお前は謙作カネ。」と老人が背後ろから言った。

私はその言葉で突きのめされたように感じた。そして立ち止まった。振り返った私は心では用心していたが、首はいつかおとなしくうなずいてしまった。

「お父さんは在宅カネ？」と老人が訊いた。

私は首を振った。しかしこの上手な物言いが変に私を圧迫した。

老人は近寄って来て私の頭へ手ををやり、

「大きくなった。」と言った。

この老人が何者であるか、私には解らなかった。しかしある不思議な本能で、それが近い肉親であることをすでに感じていた。私は息苦しくなってきた。

老人はそのまま帰って行った。

二三日するとその老人はまたやって来た。その時私は初めてそれを祖父として父から紹介された。

さらに十日ほどすると、なぜか私だけがその祖父の家に引きとられることになった。そして私は根岸のお行の松に近いある横町の奥の小さい古屋に引きとられていった。

そこには祖父のほかにお栄という二十三四の女がいた。

私の周囲の空気はまったく今までとは変わっていた。すべてが貧乏くさく下品だった。

ほかの同胞が皆自家に残っているのに、自分だけがこの下品な祖父に引きとられたことは、子供ながらに面白くなかった。しかし不公平には幼時からならされていた。今に始まったことでないだけ、なぜかを他人に訊く気も私には起こらなかった。㊡しかしこういう風にして、こんなことが、これからの生涯にもたびたび起こるだろうと

いう漠然とした予感が、私の気持ちを淋しくした。それにつけても私は二ヶ月前に死んだ母を憶い、悲しい気持ちになった。

父は私に積極的につらく当たることはなかったが、常に常に冷たかった。が、Cこのことには私はあまりに慣らされていた。Dそれが私にとって、父子関係の経験としての全体だった。私はほかの同胞の同じ経験をEそれに比較するさえ知らなかった。それゆえ、私はFそのことをそう悲しくは感じなかった。

母はどちらかといえば私には邪慳だった。私はことごとくに叱られた。実際私はきかん坊でわがままでもあった。が、同じことが他の同胞では叱られず、私の場合だけでは叱られるようなことがよくあった。しかし、それにもかかわらず、私は心から母を慕い愛していた。

問い一 下線部①「不意に祖父が私の前に現れてきた」とある。AとBの質問に自分の言葉で、それぞれ簡潔に纏めよ。(8点)

A、突然に現れた祖父の容貌が謙作にどんな印象を与えたか。

B、突然に現れた祖父に謙作の心情と行動がどう推移していたか。

問い二 下線部②「しかしAこういう風にして、Bこんなことが、これからの生涯にもたびたび起こるだろうという漠然とした予感」とあるが、

A、Bのところの指示語は何を指すか、具体的に述べよ。(4点)

問い三 C、D、E、Fのところの語句は何を指すか。(4点)

問い四 問題文の内容に基づき、常に常に冷たかった父が謙作をどのように見ていると思われるか。簡潔に説明せよ。(5点)

問い五 祖父の親しみと母の邪慳とに対し、謙作はどのように受け取っているか、問題文の内容に基づいて、簡潔に説明せよ。(6点)